

日本中世都市史研究とドイツ中世都市

仁 木 宏

筆者は、COE プログラムにともなって、平成 15 年 2 月 24 日から同 3 月 24 日まで、ドイツ（ハンブルク大学）に派遣される。

本稿では、日本中世都市を研究する筆者が、現代ドイツにおいて、どのような目的をもって調査をおこなう予定か、報告しておきたい。

かつて、日本中世史の多くの研究者は、法制度や自治の側面において、日本中世都市とドイツ中世都市を比較研究していた。しかし、近年、そうした視角からの研究は決して盛んとはいえない。一方、近年の日本中世都市史においては、考古学や建築史学、歴史地理学との連携のもと、都市の空間構造を分析し、そこから都市社会のあり方を解明する研究が活発におこなわれている。

筆者も、そうした視点から、大坂（石山）をはじめとする寺内町や、京都・堺などの巨大都市、また全国の城下町などについて研究を進めている。筆者は文献史研究者であり、文字資料をもっとも基本にしているが、絵画資料、地図資料や考古学の成果、またフィールドワークによって得られた知見なども、中世都市の構造を考察する際に積極的に利用している。

絵画・地図資料については、時代がさかのぼるほどデフォルメされているのが通例であり、そのまま現実の都市空間を表現しているとは考えられない。しかし、そうした資料には、それぞれの地図制作（命令）者の都市に対する「認識」が表現されており、そうした「認識」のあり方からむしろ都市の本質にせまることができ

る場合もある。

フィールドワークによって見聞きすることができるのは、もちろん現代の都市の姿である。しかし、その知見を、文献資料や絵画・地図資料と照らし合わせることによって、中世都市の空間・景観を復元する資料として、十分、使用できると考える。

これらの研究方法は、歴史学の世界では必ずしも確立した方法となりえていないが、試行錯誤を繰り返す中で、徐々に科学的な分析方法を発達させつつあるといえよう。

筆者は、ここ数年、フランス・イタリア・ベトナムなどに調査旅行し、そのたびに各国の中世・近世都市のフィールドワークをおこなってきた。また、現地でしか入手できない、古地図集などの資料も収集を重ねている。ベトナムにおけるそうした研究成果については、簡単な報告をおこなったことがある（「王城と市町ータンロン＝ハノイの都市プランー」、海域アジア史研究会、2002 年 7 月 19 日）。

今回のドイツ派遣に際しても、上に述べたような研究視角から、中世都市の構造を色濃く残す諸都市をフィールドワークするとともに、地図資料や文献資料の収集を中心におこなうものである。

日本中世都市とドイツ中世都市を比較するにあたって、現段階では、三つの視角を念頭においている。

一つは、古代都市から中世都市への変遷であ

る。

日本の古代都市の空間構造上の特徴は、方格（碁盤目）状の道路によって都市の領域を示すことである。これは、平城京・平安京といった都城にかぎらず、大宰府や諸国の国府（国衙）などにも共通する。一方、ヨーロッパにおいても、古代ローマがイタリアやフランスに建設した植民都市においては、方格状の道路遺構が確認されている。

時代が古代から中世に変わると、日本においては、そうした方格地割は京都などをのぞき、放棄されたように考えられているが、都市領主の「認識」の世界では相変わらず踏襲されていた。また、中世都市の建設場所は、地方都市の場合、古代の国府から若干、移動するのが普通である。これに対してヨーロッパ中世都市の多くは、古代都市遺跡の上に築造されている。その都市プランは、古代の方格地割の影響を受けつつも、それを無視して新たな道路網を敷く場合が多い。

このように、古代においては比較的類似性の強い都市が建設された日本とヨーロッパにおいて、どうして中世都市の段階で、その立地や空間構造に変化が生じたのか、探りたい。具体的には、ケルンやトリアーを対象とする。

第二の視角は、中世都市を囲う市壁の評価である。

従来、日本の都市とヨーロッパの都市の違いを強調する際、日本の都市には市壁が築かれないことをあげる場合が多かった。しかし、近年の研究によれば、日本においても戦国時代、京都や寺内町、それに多くの城下町で、民衆の居住地を圍繞する「惣構」（そうがまえ）とよばれる市壁の存在が明らかとなってきた。さらに、そうした市壁を、単に軍事防衛上の存在と考えるのではなく、都市と農村を区別する境界装置、都市領主が目に見える形で「平和」をあたえるシンボルとみなすなど、多様な解釈が生まれつつある。もちろん、こうした議論はヨーロッパ都市研究の方が進んでおり、そうした成果を学びたい。

その際、文献研究はもちろん試みねばならないが、今回の派遣にあたっては、フィールドワークを重視したい。すなわち、日本とちがって、

ドイツには中世以来の市壁が完存している都市が多い（ネルトリンゲン・ディンケルスビュールなど）。また地上には残っていなくても、その遺構は古地図などによって容易に復元できる。市壁の中に囲い込まれているものは何か。と同時に、市壁の外側に「追い出された」ものは何かに注目する必要がある。具体的には、墓地、被差別民の集落などであろうか。市壁の圍繞範囲と地形との関係についても、現地を確認したい。

第三の課題は、港市の比較研究である。

日本中世史においては、近年、港湾都市についての研究が進み、自然地形の復元から港の形態を解明したり、太平洋・日本海水運の活発な展開が注目されたりしている。そうした観点で、ドイツにおいてはハンザ同盟の諸都市を多く踏査する予定である。

日本中世の港町の多くは、河川の河口部で、外海の波の影響を受けにくい滞水域を選んで築造された。具体的な港湾施設については不明な点が多いが、たいていは湾内に停泊する外洋船舶に舳をつかって荷物を積み込んでいたと考えられている。これに対して、ヨーロッパの港町は、河川下流部の中州にできる場合が多い。また、先述の視角との関係で言えば、こうしたドイツの港湾都市特有の市壁のあり方にも注目したい。ハンブルクをふくめ、ドイツ北部にはハンザ同盟都市が多いが、とりわけリューベックやシュトラールズントが古い空間構造をよく残している。

今回の派遣でえた知見は、帰国後、第8回のCOE-A研究会で報告予定である。また、その成果は、『都市文化研究』誌上や授業において広く還元してゆきたいと考えている。